

現地ルポ 急斜地に酪農で生きる

川上郡川上町

酪農県である岡山県の乳牛飼養頭数も3万台には軽く到達したが、その後は掛け声ばかりで思うようには伸びていないようである。しかしながら規模は徐々に拡大されてきており、山ばかりの川上郡川上町でも傾斜地を利用しての酪農がさかんになった。特に、自給飼料の生産にはげんでいる姿はこれからの酪農のいきたかを示しているものであろう。

山ばかりの町

1、川上町とは

川上郡川上町に行くには、国鉄の備中高梁駅からバスに乗り、成羽川にそった山合いを西に30kmもさかのぼらなければならないが、溪流をたどる道の景色は美しく、その眺めはたいへんたのしくあきることがない。

この町は昭和29年4月に旧手荘町、大賀村、高山村の3ヵ町村が合併して生れた人口1万たらずの町である。中国山脈の山ひだ吉備高原にあつて、山が幾重にも並び、連なり、重なりあつて、その間には溪流が流れ下り、美しい山岳村といえるが、それだけに傾斜のついていない土地は皆無で、農耕には極めて不便である。耕地は少なく、町の総面積の5%にも満たない。こんな猫の額のような水田に作られる水稻では収量もあがらず町自体、米を自給できな



傾斜地にリッパなとうもろこしが作られている

くて移入している。

この狭い土地を利用して、この地帯は昔から葉タバコの作付けがさかんであつた。現在でも町として相当の現金収入の道となっている。昭和38年度の作付け面積と収入額を示すと、作付け面積7,731a、総売上金額5,814万円となっている。その他に、白菜、甘藍などの野菜ものもかなり作られていたが、これは年によって変動が激しいために、だんだんと作付けが減少してきた。

このようにタバコを除いては、この土地で現金収入源となるものはほとんどない。しかし、広い山林を持っている農家も多く、かなりの財産持ちの農家も見うけられる。

また、川上町には弥高山公園という絶景の観光地もあつて、夏の緑の季節にはハイカー達で賑わっている。

2、川上町の酪農

黒牛から乳牛へ

もともとこの地方は川上牛として知られている和牛の産地で、和牛生産のさかんな地域であつた。しかし、最近では和牛の生産性が急激に低くなったので、



僅かの水田と白く見える葉タバコ乾燥用ビニールハウス

岡山畜産便り 1964.10・11

農家の和牛に対する意欲がうすれてしまった。

こんな時に、昭和 31、32 年の乳牛ブームに乗ってこの町にも大賀地区を中心にして乳牛が導入された。乳牛が入ったところは、どこも川上町の一番高い地域で、標高 400m以上のところが多い。現在、町内に 10 ヶ所の酪農団地が存在し乳牛飼養戸数 147 戸、飼養頭数 467 頭である。最近の動向が第 1 表である。

当初は農家の酪農技術が低かったため基礎飼料といえは稲ワラをやる程度で、飼料作物の作付けはまるっきりなかった。濃厚飼料についても、使用方法がでたらめで牛乳の生産量は非常に低かった。

まず、飼料作物を作ってから！

その後、技術指導者の努力によって、また農家の自覚によって、基礎飼料の重要性が認識されてきた。傾斜ばかりの土地であるため、延べ面積にしたら相当になる畦畔草の利用はもとより、普通畑の飼料圃への切換え、山林の開墾がすすめられて、夏の間の草はあまるほど確保されるようになった。傾斜地であるので機械の使用などはむずかしい点も多いが、どこの酪農家も堆厩肥を十二分に施して金肥をあまり使わずにすばらしい飼料作物を作っている。とうもろこし、ソルゴーなどの青々としたみごとなでき具合は、ほかの地域では見られなかったすばらしいものである。また、この地方は山ばかりの土地であるのに、表土層が深く、しかも岩塊を含んでいない完全に風化した土壌であって、山林を切開いた場合でも堆厩肥を十分に入れることによって良好な飼料畑になった。

いずれの酪農家にも乳牛は草で飼うもの、ということがよく認識されていて、最近、構造改善事業で新しく草地造成を行った農家はべつとして、夏季には畦畔草が伸びすぎるため刈取りに追われるほど生草に余裕のある農家もある。こんな具合で FM 率も、町全体を見て 50%を下廻っている。しかしながら、まず、草の生産を多くすることに力が入られてきたため、基礎飼料の年間配分の計画がうまく樹てられておらず、冬季間ほどこの農家も稲ワラを近所から購入して与えている状態であって、改めなければならない重要な点である。また、サイロの設置していないところも多い。



山の上の甘藷畑

1 表 最近の乳牛及び和牛の飼養動向

区 分	昭和35年		昭和36年		昭和37年		昭和38年	
	乳牛	和牛	乳牛	和牛	乳牛	和牛	乳牛	和牛
飼 養 戸 数	戸 148	885	155	815	158	694	147	637
飼 養 頭 数	頭 314	977	406	958	466	839	467	744
1 戸 当 り 平 均 頭 数	頭 2.1	1.1	2.6	1.2	2.9	1.2	3.2	1.2

3、そして専業酪農へ

ところで、酪農が重点を占めるようになってくると、労力面で競争が出てくるようになった。つまり、タバコ作と重なり、たいへん過重になってきたのである。葉タバコの収穫期には徹夜で乾燥しなければならない。幼ない子供の手まで借りなければならない。そのため乳牛の管理が手薄となり、故障牛を出して酪農はやめなければならなくなった農家もあるし、無理な労働から身体をこわす人もたくさんあった。

しかし、土地で生きようとすればタバコを作るか、乳牛を飼うよりほかに方法のないところ（ある酪農家の話）である。

そこで酪農で生きようとする農家はつぎつぎとタバコ作りをやめてしまった。それでも、タバコは専業酪農へと、資金を蓄積するためには必要な道であった。タバコ作りをやめて酪農専業に踏切ったお陰で労働がたいへん楽になったのみならず、家族全員が気分的に余裕ができたとは、どの専業酪農家からも聞かれる言葉である。

酪農の施設

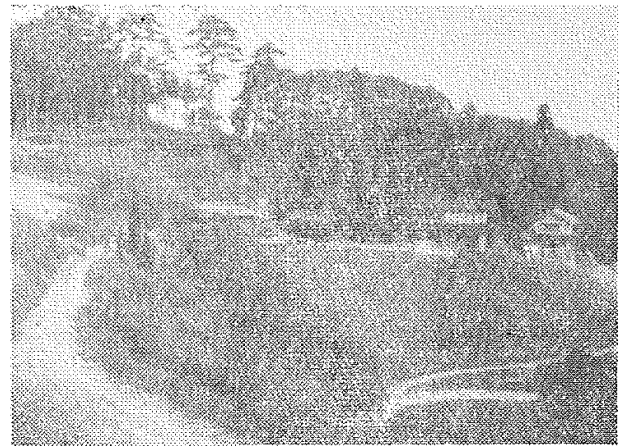
町でも農協でも、川上町の酪農を発展させるために農協組合長はじめとして非常に力を入れている。

岡山畜産便り 1964.10・11

前から小さな牛乳処理場はあったが、手いっぱいになったため新しく集乳所を設置し、川上町のみならず、近在の牛乳までも集めて移送している。

この牛乳を集めるのには、毎朝集乳車が谷合いのまがりくねった急な坂道を、町じゅうの酪農家から集めてまわる費用は相当なものになっている。

さらに、畜産センターを建設して人工授精を広くすすめており、川上町の酪農がこれから伸びるための基盤は完成している。



亀石宅全景 家の前の畑は45°の傾斜がある

4、代表的な酪農家

川上町の酪農の中心地である大賀地区で健全な専業酪農を営んでいる亀石辰巳さんは、37才の働き盛りである。住居は山のいただきにあつて、傾斜を利用しての厩肥の積出しには都合がよいが、交通運搬には不便このうえない。

経営規模の概略は1毛田 46 a、普通畑 1,120 a、飼料圃 110 a。山林 1,190 a、採草地 220 aで、この地域で大農の部類に入る。しかし、これらの耕地も10ヵ所に分散している。

自家消費用の米のほか、小麦、大麦、馬鈴薯などはすべて飼料に利用しており、酪農以外の収入はマツタケ販売による5万円前後のほかにはない。現在、経産牛5頭、育成牛2頭の7頭であるが、将来は10頭以上にしたいという話である。昭和38年度は4頭搾乳であったが、その収支概要は第2表である。

タバコをやめて草作りに！

以前は和牛を飼っていたが、34年にはやめ、そして36年には専業酪農に踏切ることにしてタバコ、白菜、甘藍など全部やめてしまった。31年より乳牛を飼い始めたが、当初は思うようにならなかったようである。賢明なことは借金をしないで、自己資金のみで徐々に増頭してきたことである。牛舎も和牛舎を改造したもので、こんご増頭するには増築することが必要であるが、固定施設に金をかけていない。

特にそのやり方は基礎飼料を中心にしたもので、

FM率もなんと26.5%と県平均の半分にすぎない。

昨年度の飼料作物の作付けを見ると、オーチャード、デントコーン、ソルゴー、甘藷など延べ面積200 a、収量合計177,600kg、それに畦畔草、野草が相当量あるから、15頭以上の成牛が十分飼える量である。牛を増やしてからあわてて草作りを始めるのが一般の農家であるが、亀石氏は傾斜地に厩肥を十分施して立派な青刈作物を作っている景感はその人の認識の深さと技術の高さを物語っている。これからは、この草の年間給与の方法を工夫しなければならないことである。

ただ1つの欠点は牛が小柄なため、草の喰い込み量が足りないのと、濃厚飼料の給与量が少ないために、全般に牛がやせていることである。

しかし、平均産乳量は38年度に5,441kgを出しており、かなり高能力である。

そしてもう1つすぐれている点は、草を十分与えて、山林を利用した運動場で十分に運動ができるために故障牛が出ないことである。乳房炎の薬を常備してあるが、使い方も知らないと言っている亀石さんは言う。

その就業状況も、酪農専業に踏切ったお陰で飼養管理時間は、1日6時間15分と省力されており、休憩時間も就業時間中4時間も取っており、他産業に比べて少しも劣っていない。

第2表 亀石氏の昭和38年度収支概要

(単位：千円)

収 入				支 出								差引概算粗収
牛乳販売収入	産犢販売収入	産犢自家保留	計	購入飼料費	肥料種苗費	光熱燃料費	共済掛金等	償却費	種付費衛生費	その他	計	
665	36	55	757	206	24	23	34	94	9	53	443	313

5、発展するために解決しなければならない点

山ばかりの畑作地帯である川上町で、何で食ってゆくかになるとむづかしいが、やはり酪農主体か、タバコ作が中心だろう。なかでも、酪農の自立経営、または専業経営が一番安定していると思われる。

順調に伸びている酪農家も多いが、町全体の酪農を発展させるためにはまだ数々の問題となる点を解決してゆかなければならない。

問題点

- 1、必要量の自給飼料が確保できる生産基盤を整える（急傾斜地をどう切開くか）。
- 2、乳牛の飼養管理と飼料作に要する労力があるかどうか。
- 3、規模拡大に要する資金の調達が可能であるか（自己資金 60%以上）。
- 4、経費の節減のため集団化ができるか（集乳の経費）。
- 5、酪農経営指導のための機構を整えること。
- 6、町並びに農協などが行政的、経済的に援助できるか。
- 7、酪農家が酪農を生活の源として、飼養管理、経営技術の向上に意欲を持つことができるかどうか。

など、一応問題があるが、しかし、これも町や農協の力の入れ具合、酪農家の意欲から考えれば解決できるものばかりのように思われる。とすれば川上町酪農の発展のための基盤は心配ないと言ってよいようである。

6、おわりに

全般的に見てたいへん立派な経営の酪農家が多いところである。平均産乳量もかなりの高水準であるが、今一步の飼養管理技術の向上によって、もっと増加できる牛が揃っているように思われる。

ただ、家の周囲の地形があまりにも急峻な酪農家もあって、飼料の運搬など考えねばならないところもある。このような傾斜 60 度以上の山林も、巧く利用して育成牛の運動場にし、肢蹄の強い牛を育て上げている農家もある。立派である。

いずれの農家も、この傾斜の多い土地を上手に利用しており、こんごの発展が期待される。

(孝忠 記)